

ART KISS LETTER

[アート・キッスレター]

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE

Contemporary Art Museum, Kumamoto

熊本市現代美術館発行 <http://www.camk.or.jp>

vol.51

FREE

SPRING
[2011.春号]



巻頭言 時代を牽引するギャラリスト小山登美夫さん

熊本市現代美術館館長 桜井武

今回のアートバレード審査員である小山登美夫さんは、今、テレビ、新聞、雑誌等のジャーナリズムでしばしば取り上げられ、日本の現代美術界を牽引するギャラリストである。彼のダイナミックな行動力と広い影響力は、多くの人々の注意を引きつけてきた。ギャラリストとは比較的新しい言葉で、もともとは美術を商う画商とか、アート・ディーラーを呼ぶことが一般的であった。基本的にはギャラリー(画廊)を持ち、それを運営する者と言う意味である。しかしこのところ注目されているのは、小山さんを始めとする画廊主たちが、ただ単に美術品を売買するだけでなく、才能ある無名の芸術家を発掘し、育て、世に問う仕事を中核に置いていることである。したがって扱う作品は、主として同時代作家の最新作となる。また彼らが視野に入れ、活動する範囲は国内だけでなく、広くアジアや欧米諸国に及ぶ。モチベーションやビジョンがかつてのディーラーたちと大分異なるのである。欧米では、ギャラリストが自分の画廊の領域を超え、美術館や大規模なオルタナティブ・スペースで、展覧会を実現するケースがしばしば見られる。さらにアーティスト自身がギャラリストとなって、展覧会事業に乗り出すこともある。最近ではデミアン・ハーストや彼の同世代のロンドンのアーティスト“YBA”が、作家として、キュレーターとして、そしてギャラリストとして活躍した例もある。ギャラリストにとってもうひとつ重要な活動の場は、国際的な美術の見本市アートフェアである。小山さんはスイスのバーゼルやロンドンのフリーズ等、欧米の主要なほとんどのフェアに精力的に参加し、日本のアーティストのプロモーションに努めている。ギャラリストとしての確固とした信念に基づき、外国にいても常にこやかさを失わない彼の爽やかな外交的手腕は印象的である。日本の現代美術の推進者でありスポークスマンである小山登美夫さんは、大いに期待されるギャラリストである。

熊本県現代 美術館の活動

MUSEUM INFORMATION

「命の花壇」が冬の花へと植えかえられました

2010.12.7

熊本養護学校農芸班のみなさんによる命の花壇の冬の花への植え替え作業が行われました。当日の天気は生憎の曇り空でしたが、厳しい寒さのなか生徒さんたちは頑張ってたくさんの苗を植えてくれました。植え終わりを待っていたかのように空からはポツリポツリと雨粒が…。間に合ってよかったねえ、とほっと一息つきました。今回植えられた花は、ストック、ヴィオラ、パンジー、なでしこ、ノースポール、アリッサムの6種類。寒さに負けずにたくさんの花を咲かせてくれています。色とりどりの花々を楽しみに美術館に遊びに来てくださいね。(S.Y)



明後日朝顔プロジェクト 2010 ミニリース作りをしました

2010.12.12

秋に収穫した明後日朝顔のツルを使って、クリスマスにぴったりのミニリース作りのワークショップを開催しました。

「朝顔のツルでリースが出来るんですね！」と驚かれた方もいらっしゃるほど、くるくるとまかれたツルは軽くてしなやかなんです。色とりどりのリボンやプレゼント、ベルなどの飾りをつけて、華やかなリースが仕上がりました。参加者の方にはそれぞれの手作りリースと、今年の晩秋に収穫された朝顔の種をプレゼント。素敵なリースに囲まれてクリスマスの訪れが待ち遠しく思うワークショップでした。(Y.M)

【参加人数：10人】



CAMK レクチャー・カレッジ

2011.1.9&1.16

「舟越 桂」

2011.1.9

「舟越桂 2010」展は約30年に及ぶ制作活動のなかから、22点の彫刻、30点の版画、20点のドローイングを紹介した展覧会です。約10年区切りのゾーンに分け、形態の変遷、各時期の特徴を知ることができるように構成した背景などと、展覧会を企画した当館主任学芸員の本田代志子が解説しました。(Y.H)

【参加人数：60人】



展示風景

「光の絵画」

2011.1.16

「光の絵画 vol.3-祈りの風景-展」関連イベントとして、担当学芸員の蔵座が過去に開催された展覧会を紹介しながら当館と菊池恵楓園のこれまでの関わりについて話をしました。絵画クラブメンバーの個性あふれる作品の画像とともに、そのメンバーの人となりや垣間見られるエピソードなども紹介し、作品をより身近に感じていただけたようです。(E.Z)

【参加人数：20人】

「舟越桂 2010 展」と「光の絵画展」のプレママ&ファミリーツアーを行いました。今回はいつもに増して多くのお申し込みをいただき、2 グループに分かれて出発することに。中には、意外なことに、舟越作品の「目」がこわいよ～という子もいましたが、ツアーが終わる頃にはすっかり笑顔で楽しんでいただけたようでした。(A.S)

【参加人数：27人】

STREET ART-PLEX 協働事業

2010.12.12&2011.2.12

on the corner 2010 SAXOPHOBIA

2010.12.12

日本のジャズ界を代表するジャズサクソ四重奏団「サキソフォビア」(緑川英徳、竹内直、岡淳、井上"JUJU" 博之)の皆さんによるコンサートを開催しました。ロシアの民謡から、皆で楽しむクリスマスソング、コルトレーンのジャズの名曲、オリジナル曲まで贅沢なレパートリーで、会場は素敵な音楽で満ち溢れました。サクソのみならず、篠笛、フルートも交えた豊かなアレンジは圧巻です。会場を盛り上げる完成度の高いパフォーマンスに、客席からは鳴り止まない拍手。熱気に包まれたライブとなりました！(A.A)

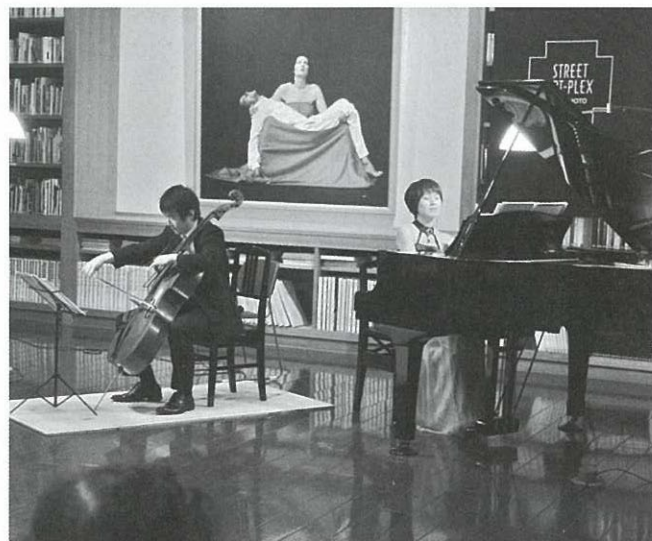
【参加人数：110人】

山本裕康チェロスペシャルコンサート

2011.2.12

神奈川フィルハーモニー管弦楽団の首席チェロ奏者である、山本裕康さんのチェロスペシャルコンサートを開催しました。今回はゲストとして、ピアニストの諸田由里子さんもお迎えしました。リベルタンゴやチェロソナタなど数々の名曲が演奏され、洗練された音色に来場者はうっとりとして聴き入っている様子でした。楽器や演奏曲にまつわる山本さんのエピソードなども楽しく、大変心安らく素敵なコンサートになりました。(M.O)

【参加人数：150人】

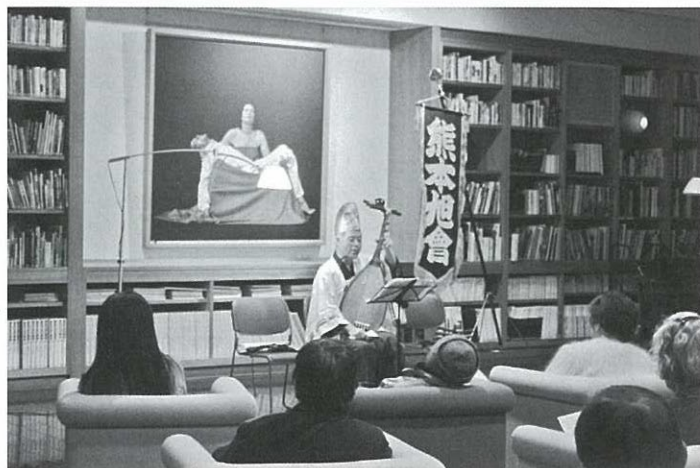


ミュージック・ウェーブ

No.043 新春コンサート

2011.1.8

筑前琵琶熊本旭会会長の小島旭寶さんによる新春コンサートを開催しました。新春にふさわしい祝賀の曲から、現在開催中の「舟越桂 2010」と「光の絵画 vol.3 祈りの風景」が選曲のきっかけとなった「加藤清正」や「あつもり」まで、CAMKにちなんだ曲目を演奏して下さいました。また、曲の合間のトークは、琵琶を知る貴重な機会となりました。伝統芸能である肥後琵琶が、これからも受け継がれ、多くの方々に愛されることを願っております。(A.A)



【参加人数：60人】

浅井裕介さんが熊本で土の採集を行いました
2011.1.19&1.20

2011年4月9日より開催の「水・火・大地 ～創造の源を求めて」展出品作家・浅井裕介さんが来熊されて熊本の土の採集を行いました。

浅井さんは「水・火・大地」展で泥絵の壁画の公開制作を予定しています。泥絵に用いられるのは作品を制作するその土地の土。絵具として使える土を探す過程、土を分けてもらえないか土地の人と話す過程が浅井さんにとってはとても大事だそうです。今回は阿蘇(阿蘇神社)、熊本城を中心に土を求めてぐらりと熊本を巡りました。冬の阿蘇は雪景色。熊本では珍しい雪を踏みしめの探索となりました。真摯に土と、その土地と、その土地の人々と対峙する浅井さんが描く壁画は4月公開です。(M.F)



第10回お話し玉手箱 LIVE

2011.2.13

2009年の3月に始まったお話し玉手箱 LIVE もとうとう10回目を迎えました。朗読は RKK アナウンサーの本田史郎さんと福島絵美さんです。今回はピアノの伴奏もあり、嶽道明俊さんに演奏していただきました。演目はバレンタイン・デー前日ということもあり愛にまつわるお話しを2編。「天女の羽衣」、そして「60歳のラブレター」です。「天女の羽衣」は全国に伝わる羽衣伝説の熊本版を朗読。恋するがゆえにちょっと身勝手な男と最後に自分を貰った女のお話し。誰でも知っているストーリーも朗読で聴くとまた新しい魅力が見えてきます。「60歳のラブレター」では本田さんと福島さんが交互に手紙を朗読します。柔らかな声と優しくすこし不器用な言葉がじわりと心に響きます。嶽道さんのピアノも相まって、会場では涙ぐむ人もいた模様。感慨深かった方が多かったようで、イベント終了後も色々な感想が寄せられました。(M.F)

【参加人数：70人】



CAMK「読みがたり」

2010.12.18&2011.1.15

第16回

2010.12.18

12月のテーマは「クリスマス」。歌いながら展開していくパネルシアター『10人のサンタ』では、ツリーがひっくり返ってサンタクロースに早変わり！そのサンタさんが10人集まってケーキに大変身！と目が離せませんでした。他にも、五味太郎さんの『まどから☆おくりもの』の大型絵本などクリスマス感満載でお届けしました。(C.T)

【参加人数：20人】

第17回

2011.1.15

テーマは「冬のおはなし」。今回は初の試みで詩『てぶくろ』を披露しました。左右が毛糸の糸でつながっている桃色の手袋を見せながらの詩に、子どもたちはしっかりと耳を傾けてくれました。また、お父さん、お母さんのお膝の上でぎゅーと抱きしめてもらう親子遊び♪『だっこしてビタミンC』では「キヤー」という大喜びの音が聞かれました。(C.T)

【参加人数：17人】



第 86 回

2011.1.27

テーマ「願い」でした。すでに手にしていたものを喪失して再び得たいという思い、あるいは、いま与えられているものに気づくためのステップなど、さまざまでありながら、常に「いま」を交錯している願いが語られました。本日は、飛び入り 3 名を加えた、これまでで最も多い 15 名の朗読が行われ、盛大で充実したひとときとなりました。(Y.H)

第 87 回

2011.2.24

「樹木」をテーマに 10 名の方が発表されました。長い年月忍耐強く静かに立ち、多くの恵みをもたらしてくれる樹木。そんなたくましい生命力溢れる樹木と一人一人の親密な対話を聞くような心温まる朗読会となりました。(M.O)

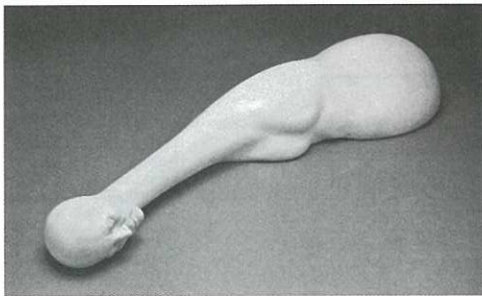
G III-Vol.75 「春の足おとー熊本市現代美術館コレクションより」展

2011.1.12～2.28

同時開催：「河原町アートアワード」熊本市現代美術館賞作品展示

今回は 2008 年及び 2009 年に新しく当館の収蔵品となった作品より、日本の現代美術シーンを担う、蜷川実花、今田淳子、篠塚聖哉、名護朝和の若手作家 4 名の作品を紹介し、また、あわせて、2010 年 10 月に行われた「河原町アートアワード」における、熊本市現代美術館賞の受賞作品・杉浦慎一「妄人」の展示も同時に行いました。

※本賞の授与は、地元の若手作家を応援し、作品制作へのアドバイスや発表の機会を提供するという目的で、2009 年度より実施しています。(A.S)



杉浦慎一「妄人」



第 22 回熊本市市民美術展 熊本アートパレード

2011.2.26～3.13

毎年恒例の熊本市民による熊本アートパレード。今年で 22 回目の開催となります。今回はギャラリストの小山登美夫氏を審査員に迎え、「今の自分にできること」をテーマに作品を募集しました。立体作品の出品が増え、絵画、彫刻、書、写真、映像など 388 点の作品が会場いっぱい展示されるバラエティー豊かな美術展となりました。(A.A)

第 31 回 熊本市造形展 中学校の部

2011.2.26～3.13

今年で 31 回目を迎える「熊本市造形展中学校の部」は、熊本市内の中学校 43 校から、美術の時間に制作された優秀作品が一同に展示されました。合併により本年度より植木地区の中学校も加わり、一層にぎやかな展示となりました。(A.S)

第 16 回シルバー文化作品展

2011.2.26～3.13

今回の出品点数は 183 点で、書や絵画、刺繍、彫刻、人形、写真、パッチワーク、籠細工など多様な表現の作品が並びました。どの作品も、じっくり時間をかけて丁寧に制作された様子と、長くその表現を続けてきた熟練と、自由にあふれた表現が魅力的でした。(H.T)

ART de Gyan!

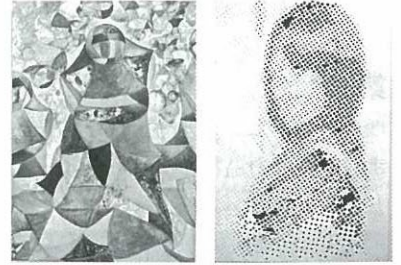
[アート・ド・ギャン]
熊本弁で「アート、どう?」の意です

[展評]

第 22 回大津高校美術コース卒業制作展・第 63 回陽美展

2011.2.8～2011.2.13 熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2 096-351-8411

大津高校美術コースの卒展と、職員・卒業生・在校生による展示「陽美展」が行われた。卒業制作作品者のキャプションパネルには、卒業に向けての想いや、本人の全身写真が動きの楽しいポーズでコラージュされるなど、よい工夫がされていた。卒業制作作品では佐藤成美さんの《私》が目をついた。木製ボードをパンチングして本人のシルエットを描きだしている。部分的に荒さのある穴の空き具合がハイティーン女子の勢いと魅力をうまく投影している。在校生の作品では、2年の松永望宏さんの《人間》に力を感じた。部分的に刺繍糸を貼り付けるなどの素材の組み合わせ、クレードローネの影響の強い色彩構成、そして幾何学的造形表現への探求は、真剣な姿勢と才能を感じた。この方向をさらに推し進めていただきたいものである。(H.T)



原田純也 リサイクル展 2

2011.2.1～2011.2.10 IRONS ギャラリー
熊本市御領 1-1-98 096-385-3233

シンプルなおトートバックやペンケースが白く上品な革でつくられている…と思いきや、素材はなんと牛乳パック。革と感じたのは作者の手で何回もみ込まれたしわの質感。触り心地もとっても手にしっくり。特に文庫本サイズのブックカバーは抜群の馴染み感だ。作者である原田純也さんはフリーのデザイナーとして活動しながら、小学生野球チームの監督もしているという、とってもエネルギッシュな方である。思いついた紙パック小物の類を作るために初めてミシンにも挑戦したのだという。まっ白な牛乳皮に、ワンポイントの陶のボタンや、水玉やストライプ、お花柄などの裏地布もお洒落だ。今後の作品にも注目していきたい。(C.T)



KuMA Collection

2010.12.30～2011.1.6 くまもと阪神(現・県民百貨店)
熊本市桜町3番22号 096-322-1111

熊本県内で活躍する若手&実力派アーティストたちの展覧会。エントランスには大きな「KuMA」の文字とアーティストたちの寄せ書きが迎える。賑やかな会場内では、作品だけでなく、カフェや占いなど美術の枠にとらわれない自由な表現を体感することができる。アーティストと来場者の距離が近く、作品に対する熱意を直に感じる事ができた。約70組が参加する大規模なグループ展ならではの充実感が得られた。熊本という地方でありながら個性があふれる土地で、これから何を表現し、発信していくのか。今後の楽しみである。(Y.M)



SAAP 次世代の担い手たち展

2011.1.12～2011.1.30 崇城大学ギャラリー
熊本市花畑町10番25号 096-323-1158

崇城大学出身の平面の池田陽一と佐藤和歌子、立体の森英顕の3人展。透明感のある色彩で、幻想的で独自の世界を作りだそうとする試みを感じさせる池田。ひとつひとつの着実な歩みをみせている佐藤。立体としての堅固な存在感を示しながら、主題に沿った柔らかく丁寧な造形をなす森。各人の作品はいずれも好感が持てるものであったが、今後のより挑戦的な制作に期待したい。(Y.H)



ざわざわ展

2011.2.22～2011.3.6 崇城大学ギャラリー
熊本市花畑町10番25号 096-323-1158

崇城大学芸術学部美術学科2年生の学生有志による企画展。「ざわざわ展」とは油画、日本画、立体、デザインそれぞれのコースの学生が垣根を越えて集うことを意としたという。各分野の作品とも、自己の探求に励む学生らしいエネルギッシュなもので見ごたえのある構成となっていた。ポートレート、裸婦の立体像、動物の細密画、啓発ポスターや、東京での滞在を詳細かつ軽快に綴った日記作品など、社会の中でも通用するような力量を備えている作品も多くあった。今後もさらに間口を広げ魅力的な作品を社会に向けて発信して欲しいと感じさせる展覧会であった。(M.O)

第 12 回 書芸「風」展

2011.2.15～2011.2.21 アートスペース大宝堂
熊本県熊本市上通町5-6 096-354-2155

この書道展は、日展会友の丸山三千代さんとその弟子22人が漢字や少字数書、調和体書など約50点を展示していた。丸山さんの金銀箔による黒い和紙に書いた銀字の《福寿》はモダンで華やかである。淡墨による《桜》は文字の構成も良く白い額装にうまくマッチしている。《花鳥風月》をテーマに、全員で来民の流うちわに書いて軸装されているのもユニークであり、会場全体も新鮮な「風」が感じられて楽しい雰囲気であった。(S.K)





アーティストがみずから作品(当館収蔵作品)にコメントをよせるコーナー「レター・フロム・アーティスト」あわせてアーティストの最新情報をお届けします。

Letters from Artists

◎第10回／

名護朝和(なご・ともかず)さん
染色家。沖縄県立芸術大学講師。

Q1.《衰荷》、《回帰》についてお聞かせください。

《衰荷》と《回帰》は2005年に滋賀県で制作しました。2点とも型染作品です。技法的には糊防染で、顔料を主に使い和紙に染色しています。

少し作品から離れますが、私が生まれ育ったのは沖縄県具志川市(2005年に隣接する石川市、勝連町、与那城町が合併するま市となった)という所で沖縄県本島の中部、太平洋側に位置しています。その頃は、さとうきび等の農業生産が主で、米軍施設が点在する、闘牛やエイサー(念仏踊り)が盛んな中堅都市でした。その原風景が私の出発点であり、自然や植物、基地に張り巡らされたフェンス等も当たり前のように目にしてきた風景でした。幼少の頃から、フェンスで張り巡らされた閉鎖された世界がとても不思議でした。よく手入れされた芝生、明らかに違う人種、フェンス越しに見える閉ざされた場所が何なのか理解できなくて、まるでユートピアかのように想像を膨らませていました。しかし現実を知り、閉鎖された空間が何によって成立していたのかを認識することは、私にとって衝撃的でしたが、美しい自然と基地は、沖縄が抱えるギャップを端的に表しており、今でも挑み続けているテーマとなりました。

話しを戻しますが、私は日韓ワールドカップが開催された2002年に沖縄を離れ、滋賀県草津市に移り住んでいました。引っ越してすぐは制作する環境も整ってはならず、全く制作が出来ない状態が長く続き非常に悩んでいました。今思えば、沖縄以外で作品制作をしたことがなかった事も、作品が創れない原因だったと思います。沖縄から距離をおいて、制作しようと思ったから少し気持ちが楽になりました。ちょっとずつですが、まわりが見えてきて、沖縄とは違う自然の美しさに感動しました。また、私が住んでいる草津市は、江戸時代から東海道と中山道が接する宿場町として栄えたところで、歴史的な文化財が至る所にあり大変驚きました。環境が与える影響力の強さを認識することで、あらたな表現の原動力となり、《衰荷》と《回帰》が生まれたと思います。

《衰荷》と《回帰》は、蓮がモチーフです。近くにある烏丸半島は、国内でも有数のハス群生地で、盛夏の頃にはよく蓮畑に行っておしゃべりをしていました。蓮の花の美しさと衰退していく姿に心動かされ、制作した作品です。《衰荷》は、蓮の花弁が落ちたあとに残る花托と蕾みを画面全体に配置し、水紋と有機的な植物紋を重ねて染めました。《回帰》も同様に、背景で水紋と有機的な植物紋を重ねて染めましたが、大きく広がる葉と蓮の花が加わることで、より象徴性が増したと思います。2005年は、太平洋戦争から60年目の年でもありました。良くも悪くもリセットされる。そんな思いも重なって制作していたと思います。

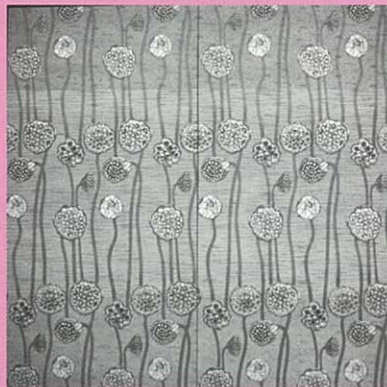
Q2. 読者の方にメッセージをお願いします。

工芸について、皆さんはどのようなイメージを持たれているのでしょうか?古くて、昔からある伝統的な技法を用いて創ったもの。あるいは民藝やクラフト的な手工芸をイメージしているかもしれないですね。わかりやすく大別すると、美術としての工芸、産業としての工芸、生活の楽しみとしての工芸があると思います。しかしながら、それらは区別がつきにくく、混同され

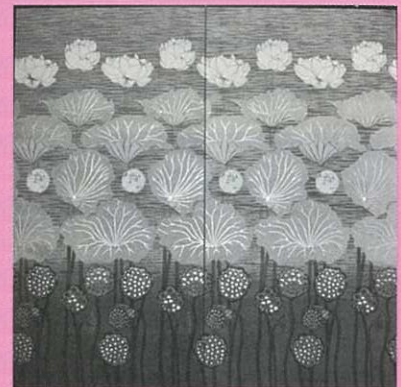
ることが多くあります。多様化する現代においては、その生活様式も一変し、工芸のみかたも変化していったと思います。私が求めている工芸は、美術としての工芸で「美しい工芸」です。それに他者との向き合うこと。工芸は生活の中で生まれ、独自の美的価値を見出したものだと思います。いまの現代社会で求められている他者との関係性や、美しく感じる精神的在り方が、工芸作品にはあると思います。多彩な工芸作品に触れ、その良さを知ってほしいと思います。

Q3. 新作はどこで見ることができそうですか。もしくは今後の展示のスケジュールを教えてください。

「現代型染展 Part1 伊砂利彦追善展 反復のリズム・集約の美」(2011年3月1日(火)~24日(木))、京都市にある染・清流館において、開催されます。展示会に出品します。伊砂利彦先生は、私の大学時代からの恩師で、残念ながら昨年3月15日にお亡くなりになりました。その追善の展示会です。5月には、浦添市美術館にて新匠工芸会沖縄展があり、その本展が8月に京都市美術館で開催されます。



《衰荷》2005年 和紙、顔料／型染 屏風
熊本市現代美術館蔵



《回帰》2005年 和紙、顔料、金粉／型染 屏風
熊本市現代美術館蔵

編集後記

今年の2-3月はいくつかの卒展を見て回りました。ミュージックPVやマンガからの強い影響のあらわれや、オーソドックスな技法の修練などそれぞれの特徴がみえましたが、若さが持つ無謀で率直な勢いが作品に直結して表現されにくい時代なのかもしれないと、しみじみ考えました。

編集長 富澤治子

今春、九州新幹線全線開通で熊本にもついに新幹線がやってきました。県外からも多くの観光客が期待されていますが、現代美術館では華やかなげばなの展示会と、熊本を象徴する「水・火・大地」をテーマにした展示会で皆様をお迎えいたします。満開の桜とともに、多彩な熊本の魅力を発見していただけたら幸いです。

担当 大岩みゆき

●発行元／ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.51 2011年3月発行(春号) ◎無料◎
●発行人／桜井 武 編集／富澤治子、大岩みゆき
●デザイン／(有)松永 社デザイン事務所 ●印刷／シモダ印刷
●発行／熊本市現代美術館 〒860-0845 熊本市上通町2-3 TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892

●執筆者一覧

*ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

兼城昌山
Syozan Kaneshiro (書道家)
本田た志子
Yoshiko Honda (熊本市現代美術館主任学芸員)
藏座江美
Emi Zoza (熊本市現代美術館学芸員)
富澤治子
Haruko Tomisawa (熊本市現代美術館学芸員)
坂本顕子
Akiko Sakamoto (熊本市現代美術館学芸員)
芦田彩葵
Aki Ashida (熊本市現代美術館学芸員)
矢加部咲
Saki Yakabe (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
大岩みゆき
Miyuki Oiwa (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
藤本真帆
Maho Fujimoto (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
高橋知江
Chie Takahashi (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
村上 由起
Yuki Murakami (熊本市現代美術館総務スタッフ)

SUITOITO Kumamoto

CAMKフレンドインタビュー *今年度は熊本の次世代文化を支える人々をご紹介します。【スイトット・クマモト】

近年リニューアルオープンし、店内にギャラリースペースを設けるなど独自の店内で老若男女に親しまれる長崎書店。熊本の次世代文化を支える長崎書店代表取締役の長崎健一さんにお話を伺いました。

店舗のリニューアルにあたり、どのような想いがあったのでしょうかー

大型書店やネットの書店が台頭して商売的に厳しい時期、リニューアルオープンを念頭に、東京、京都、福岡など各地の書店を視察しました。その中で分かった事は、規模には関係なく支持されている書店があるということ。規模は大きくはないけれど、ここに来るといつも発見があり、ゆっくりと本を選べて、人や本との面白い出会いがある。他の本屋さんでは味わえない価値ある書店にしたいと2006年にリニューアルオープンをしました。

店内にギャラリースペースがありますねー

リニューアル当時は、アートに特別関心が強かったというわけではないのです。なんとなく憧れていて素敵だなあと思う程度でした。美術館や画廊や劇場など好きな人は足を運ぶけれど、そうでない人には少し敷居が高い感じがします。アートに触れるスペースが書店にあつたら誰でも気軽に訪れることができるのではないかと思います。店内にギャラリーがあるというこの取り組みが美術館に足を運んだり、音楽を聴きに出かけたりする一つのきっかけになれば、熊本の文化向上に貢献できるのかなと思っています。

ギャラリーや様々なイベントの運営を行うようになり、どの様な変化がありましたかー

本屋ですから本を仕入れて売ることが主でしたが、ギャラリースペースで絵画の展示をしたところ、作品を購入したい、という声が相次ぎ、販売を行ったこともありました。従来では出来なかったことができるようになったことで、こんな可能性が書店にあるのかという驚きがありましたね。また、書店と同じビルの3Fにあるリトルスターホールというスペースでは、これまで東京から作家をお招きしてトークショーを開催したり、ライブや朗読会、地元作家の展示やパーティを行ってきました。様々なイベントを通して非常に多くのご縁に恵まれたことが一番嬉しいことです。昨年、それらのご縁をそのまま生かしてイベントにしようということで、熊本の100人が選んだ文庫フェアも開催しました。(編者注：当館学芸員の坂本も参加しています！)

これからやってみたいことはありますか？ー

「敷居の低い文化空間」というコンセプトで、市民大学や、よりアクティブで新しい時代の「公民館」のようなものを作ってみたいと考えています。大学の先生や専門家の方など、本当に伝えたいことがある人と、学びたい人がめぐり逢えたら活力が生まれると思います。老若男女のご縁をさらに広げていくことができたらいいですね。アートに関する取り組みについては、最近、温泉地で、「アートと保養の宿」と銘打つ企画など、各地で様々な取り組みが聞かれますが、やはりアートには心を豊かにする良い効果がありますし、アートとの上手な付き合い方があると思うのです。書店として、これからも本屋とアートの幸せな関係を築いていきたいですし、熊本市現代美術館ともこの熊本の地で共に響き合ってゆきたいと思っています。



オススメの根本有華作品集『アマレット』と一緒に。

舟越桂 2010 展(展覧会アンケートより)

- 舟越桂さんの作品は初めて拝見しましたが、初期の頃からだんだんと作風が変化していく様子が興味深かったです。表情もそれぞれに違い、一点一点と向き合いながら興味深く鑑賞しました。
- 写真で見た時よりも、目の輝きや木肌、木においなど本物でしか味わえないものがありました。
- 私は今妊婦なので、舟越さんのお腹と胸の大きな像にはとても愛着が沸き力強さを感じました。
- 舟越さんの作品は学校の美術の資料でしか見た事がなかったのですが、実際に作品の前に立つとまるで自分の化身をジーンと見つめているかのような不思議な感覚になりました。決して目が合う事はないのですが、作品たちの中に宿った魂と自分自身の心が共感したように感じます。

光の絵画 vol.3 展(展覧会アンケートより)

- 作品の上手下手を超えて「絵を描く」ことの与える「力」みたいなものに心動かされます。
- 絵は特別な「画家」だけのものではないですね。私も生きていることを大切に身近な風景を大事にしたいと思いました。
- 病に冒されながらも健気にひたむきに生きようとする生の息吹が凝縮されている。
- “人間”“生きていること”ということを感じさせる展覧会でした。舟越さんの作品も無名の恵楓園の方の作品も全く差異などありませんでした。何かを表現したいという純粋な思いは同じでした。何だか心があたたまりました。

VISITOR'S LETTER

【来館者のみなさんからのメッセージ】
アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介します。

ホームギャラリーからのお便り vol.5 LETTER FROM HOME GALLERY

ホームギャラリーはおもちゃ箱？

ホームギャラリーは図書室でありながら美術作品を展示していたり、每晚ピアノを楽しめる空間ですとご紹介してきました。実はそのほかにもユニークな空間に変貌しているのです。たとえば、人形劇。熊本を拠点に活動している人形劇団による人形劇の舞台が設置されると、あっという間に子ども達でいっぱいの劇場に早変わり！わいわいきゃーきゃー子ども達の歓声が響き渡ります。また最近では3Dが流行りですが、カタカタ昔懐かしい映写機の音を聞きながらのフィルム上映会を開催するときにはちょっとしたミニシアターに。そのほかにも、琵琶やお琴などの邦楽から、管楽器などによるコンサート会場になったり、浪曲やフラメンコまでありとあらゆる表現活動が飛び出す、まさにおもちゃ箱のようなところがホームギャラリーの一番の魅力かもしれません。さて、次はどんなおもちゃが飛び出すやら。どうぞお楽しみに！(E.Z)

